



第三回長崎学公開講座 第一部発表要旨

唐絵目利渡辺家とその後

原田 博二

一、唐絵目利渡辺家（渡辺秀詮、同秀実〔鶴洲〕、同秀乾）

唐絵目利は、元禄一〇年（一六九七）に初めて設けられ、渡辺家の初代秀石（一六四二〜一七〇五）が任じられた。唐絵目利は、地役人の一つで、將軍家が購入する舶載絵画の真贋、さらには価格などを評価する役職であった。

唐絵目利は、世襲制で、当初、渡辺家だけであったが、後に石崎家、広渡家、さらには荒木家が加わり、四家となった。渡辺家は、唐絵目利の名門で、初代秀石以来、



渡辺秀詮筆「虎図」
長崎歴史文化博物館収蔵

二代秀朴、三代元周、四代秀溪、五代秀彩、六代秀詮、七代秀実（鶴洲）、八代喜代次郎と続いた。渡辺秀詮（一七四三〜一八二四）は、通称を吉十郎、正助、自適斎と号した。渡辺秀彩の養子となり、渡辺家を相続した。秀詮も唐絵目利を勤め、虎の絵を最も得意としたので「虎の吉十郎」と呼ばれた。

古賀十二郎先生は、その著『長崎画史彙伝』（大正堂書店 昭和五七年刊、以下、『画史彙伝』と記述）の渡辺鶴洲（秀実・一七八一〜一八三二）は、秀詮の子で、通称を常次、字を元成、号を鶴洲、ほかにも親仁堂主人、居易堂主人と号した。享和二年（一八〇二）唐絵目利となる。古賀先生は、その著『画史彙伝』で「天保元庚寅年九月二十六日を以て捐館す。得年五十三」



渡辺鶴洲筆「象と黒坊図」
長崎歴史文化博物館収蔵

この会は個人会員と法人会員の皆様により運営されています



と記述されておられるが、後述するように実際は天保二年（一八三一）月日は不明に死没、五四歳であった。

二、『今魚町宗旨改踏絵帳』（江崎家所蔵）

『今魚町宗旨改踏絵帳』は、時期によって『今魚町元来宗旨改踏絵帳』、『今魚町中宗旨改踏絵帳』などとよばれ、延享二年（一七四五）から元治二年（一八六五）までの六八冊が現存。現在までまとまった踏絵帳としては、『桶屋町宗旨改踏絵帳』のみであったので、この『今魚町宗旨改踏絵帳』は貴重な資料である。

踏絵帳は、正月に各町で行われた踏絵の台帳（唯一の戸籍）で、踏絵の制度化とともに作成整備された。実際に踏絵が行われたのは、安政四年（一八五七）までで同五年（一八五八）から廃止されたが、踏絵帳の作成は、「踏絵」の文字を削除、その後『宗旨改帳』の名称で継続され、明治に至った。踏絵の当日、町内全世帯の家族構成、年齢、宗旨、檀那寺、犯罪歴などが記載された踏絵帳を台

帳にして乙名と二人の組頭の監視のもと踏絵が行われ、踏んだことが確認されると、日行使は予め預かっていた印鑑を踏絵を踏んだ人の名前の下に捺した。



川原慶賀筆「踏絵図」
ライデン世界博物館所蔵

踏絵が終わると、乙名は、日行使に命じてそれぞれの檀那寺の印鑑を取り、記載内容、印鑑等に漏れがないかなど確認、異状がなければ、踏絵帳を正月の末日までに長崎奉行所に提出した。長崎奉行所では、惣町七七か町、両町二か町の合計七九冊、さらには寺社などから提出された踏絵帳を精査、内容に異状がなければ、踏絵帳を速やかにそれぞれの町に返却した。

返却された町では、その踏絵帳をその年一年の戸籍の台帳として使用、死没者があれば●印を名前につけ、誕生があれば「名前」を記入、転入、転出があれば、「何処何処町より入」とか「何処何処町へ出ス」とか朱書きで記入したり、紙を貼ったり、付箋をつけたりしたので、年末になると、●印や書き込み、付箋などで一杯になった。そこで踏絵帳を整理、浄書本を作成、これを新年の踏絵の台帳、さらにはその一年の戸籍の台帳として使用した。

三、『踏絵帳』に見る渡辺秀詮、同鶴洲、同秀乾

吉十郎こと渡辺秀詮とその家族が『踏絵帳』に登場するのは安永二年（一七七三）からである。

（一）安永三年（一七七四）『踏絵帳』
浄土宗大音寺印
歳三拾壹 渡邊吉十郎印

この年、秀詮は、三十一歳とあるので、寛保三年（一七四三）の生まれである。秀詮の家族は、秀詮（三一歳）、女房（妻・二四歳）

長女ひで（六歳）、二女よし（二歳）、母（六三歳）の五人家族で、宗旨・檀那寺は、秀詮、女房、娘のひで、よしは、石津家と同様、浄土宗大音寺、母だけが渡辺家と同様一向宗の深崇寺檀家である。前述のように秀詮は、寛保三年の生まれである。というのは、古賀先生は、その著『画史彙伝』で、秀詮は「本姓石津氏、渡辺氏の養嗣となる。」と記述しておられるが（二四頁）、石津氏を秀詮の本姓とする論拠は何であろうか。

『踏絵帳』の残存状態が良くなく、あくまでも推測であるが、秀詮は、石津伊平次の二男で、渡辺家の養嗣子となり、同家を相続したのである。しかし、深崇寺檀家の母なる女性、渡辺家の女性で、秀詮らとの血の繋がり等はないはずである。

ということとは、秀詮はこの時点では渡辺家を相続したといっても、唐絵目利には任じられてはいなかったのである。これが正式に任じられたのは、宗旨・檀那寺を渡辺家と同様、一向宗深

崇寺に替わってからであった。ところで当時の女性は、未婚の間は名前が平仮名で書かれたが、結婚すると「女房」とのみ書かれ、名前は書かれなかった。というのは、当時は踏絵帳など公文書には、女性、未婚の時は名前を平仮名で書いたが、結婚すると「誰々の女房」が死没すると「誰々の後家」と書いた。この「女房」と「後家」が当時の女性の社会的地位を表したのである。

（二）安永七年（一七七八）『踏絵帳』

一向宗深崇寺印
歳三拾六 渡邊吉十郎印
同三拾九 ●同女房印
同三ツ 同もん印
同六拾八 「出生常次」 母印

秀詮は、いつのことか不明であるが、宗旨を浄土宗から一向宗に、檀那寺も大音寺から渡辺家の菩提寺深崇寺に替え、さらには借屋人から箇所持町人になっている。なおこの年、長男の常次こと鶴洲が死没しているが、女房が死没している。

(3) 天明三年(一七八三)『踏絵帳』一向宗深崇寺印 歳四拾壹 渡邊吉十郎印 禅宗永昌寺印 同式拾五 同女房印 同六ツ 子常次印 「生 源蔵」

秀詮は、いつのことか不明であるが、この年二五歳(宗旨は禅宗永昌寺)の女性と再婚、この年二男源蔵が、天明七年(一七八七)五女はるが生まれている。

(4) 享和二年(一八〇二)『踏絵帳』歳六拾 渡邊正助印 同式拾八 娘よし印 同拾六 同はる印 石津七郎次借屋(B) 同式拾五 渡邊常次印

この年、秀詮は、二女よし、五女はると同居、長男常次は、身内である石津七郎次の借屋(B)に別居、借屋人となった。

(5) 文化六年(一八〇九)『踏絵帳』歳六拾七 渡邊自適斎印 同式拾三 娘はる印 渡邊自適斎借屋(B) 同三拾式 渡邊常次印

惠美酒町ヨリ入 同拾九 同女房印 右同町工出

この年、常次こと鶴洲は、一九歳の女性と結婚、男児乾(後の秀乾)が生まれている。その結婚の時期は、文化五年(一八〇八)の『踏絵帳』の渡辺常次の項には、結婚に関する記載は一切ないが、この年の『踏絵帳』の常次の項には、「浄土宗聖徳寺印 同拾九 同女房」と記載され、さらには印もある。で、正月四日までには結婚していたのである。なお書き込みによると、いずれも時期は不明であるが、惠美酒町より転入、同町に転出している。ので、惠美酒町に住居の女性であった。以後、鶴洲は長男乾と同居、享和二年(一八〇二)からは石津七郎次の、文化六年(一八〇九)当時は自適斎こと秀詮の、同一四年(一八一七)からは竹森真右衛門の借屋に居住している。

歳四拾 渡邊鶴洲印 同九ツ 悴乾印 (略) 上田傳左衛門借屋(A) 歳三拾七 長八印 同拾三 娘かね印 三ツ 悴栄吉印 同五拾 家内しけ印 上田傳左衛門借屋(B) 同三拾式 たね印

秀詮の借屋がA、Bとも上田傳左衛門の名義になっている。秀詮は、文化一四年(一八一七)にこれらの借屋を長八家族居住のまま町内の箇所持町人上田傳左衛門に売却したのである。

(7) 文政七年(一八二四)『踏絵帳』貼紙「歳四拾八 渡邊鶴洲」 「五月廿九日病死」 同三拾八 渡邊自適斎印 妹はる印 竹森茂三二借屋 同四拾七 渡邊鶴洲印 子乾印 同拾六

この年の五月二九日秀詮が八二歳で病没した。深崇寺の渡辺家墓地内の秀詮の墓碑には没年が刻まれてない。鶴洲が著した「長崎畫人傳」(坂崎坦

編『日本絵画論大系四』名著普及会一九八〇年三一頁)に「文政七年[甲申]五月二十九日、時年八十九」とあることから、一般に秀詮の没年は八九歳と信じられ、『長崎畫人傳』を引用された古賀先生もその著『画史彙伝』で「得年八十九」と記述しておられるが(二七頁)、それは誤りである。

なお秀詮の項に「渡邊鶴洲」の貼紙があることから秀詮の跡は鶴洲が相続、以後、妹はると同居、乾は今までどおり竹森茂三二の借屋に一人居住した。

(8) 文政一二年(一八二九)『踏絵帳』歳五拾式 渡邊鶴洲印 同四拾三 妹はる印 竹森要左衛門借屋 歳式拾壹 病死 乾印

この年、乾が二一歳の若さで病没、将来を託していただけに鶴洲の嘆きは大きなものであったろう。

(9) 文政一三年(一八三〇)『踏絵帳』竹森要左衛門借屋 歳五拾三 渡邊鶴洲印 同四拾四 妹はる印

この年、鶴洲は、本宅を売却、妹はるとともに乾が居住していた竹森要左衛門の借屋に居住、箇所持町人から借屋人に身を落した。

(10) 天保二年(一八三一)『踏絵帳』竹森要左衛門借屋 歳五拾四 病死 渡邊鶴洲印 同四拾五 妹はる印

この年、鶴洲が五四歳で没した。鶴洲の高弟荒木千洲が著した「續長崎畫人傳草稿」(坂崎坦編『日本絵画論大系四』名著普及会一九八〇年刊)に「(鶴洲は)天保元年[庚寅]九月卒、時年五十三歳」とあり(三七頁)、さらには深崇寺の渡辺家墓地内の鶴洲の墓碑にも「天保元年歳次庚寅九月廿六日」と刻まれている。

そこで古賀先生は、その著『画史彙伝』で「天保元庚寅年一八三〇年九月二十六日を以て捐館す。得年五十三」と記述されておられるが、天保二年(一八三一)の『踏絵帳』の鶴洲の項に印があるので、鶴洲は少なくとも天保二年正月四日に今魚町で踏

絵を踏むまでは存命であった。

(11) 天保三年(一八三二)『踏絵帳』

竹森要左衛門借屋

(朱) 本下町ヨリ入

法華宗長照寺印

歳拾貳 渡邊喜代次郎印
同四拾六 伯母はる印

この年、本下町の渡辺喜代次郎(一二歳)がはるの借屋に転入、以後、はると同居した。

喜代次郎については、『慶応元年調査明細分限帳』(以下、『明細帳』と記述)に「(略)喜代次郎儀天保二卯年唐絵目利相統被仰付当丑年迄三十五年相勤」と記載されているように、鶴洲の没後、その跡を相続(渡辺家八代)、天保二年(一八三一)唐絵目利に任じられた。

喜代次郎は、『明細帳』によれば慶応元年(一八六五)は四九歳とあるが、文政四年(一八二二)の生まれであるので、実際は四四歳である。

ところで『踏絵帳』には、はるは「伯母」と記載されている。しかし、古賀先生は、その著『画史彙伝』の渡辺秀彩の項で「(喜代

次郎は) 鮫目利頭取富田惣太夫の子、渡辺家の養嗣となる。(略)鶴洲の後を承けて、唐絵目利となる。明治三庚午(一八七〇)二十六日を以て捐館す。得年五十歳。」と記述しておられる。

そこで考えるに、この渡辺家の養嗣とあるが、実態は久離義絶であろう。

(12) 天保七年(一八三六)『踏絵帳』

竹森要左衛門借屋

(朱) 西中町エ出
歳拾六 渡邊喜代次郎印

この年、喜代次郎が西中町に転出、以後、竹森要左衛門の借屋にははるが一人居住した。

(13) 天保一三年(一八四二)『踏絵帳』

竹森要左衛門借屋

(朱) 十一月長崎村エ出
歳五拾六 はる印

この年の十一月、長年居住した今魚町に別れを告げたはる(五六歳)は、長崎村に転出、その後のことは不明であるが、その地で人知れず亡くなったと思われる。

第三回長崎学公開講座 第二部発表要旨

旧制県立長崎工業学校とその歴史(戦前編)

今泉 宏

昭和初期、日中の対立が激しさを増す中、国内では軍需産業が盛んになり、長崎県においては、造船、電機、製鋼、兵器などの工場が五〇〇近く

のぼった。このような状況の下、中堅工業技術者の養成が急務となり、工業学校設立の機運が民間から高まった。

昭和一〇年(一九三五)通常県会で、田中廣太郎県知事が実業学校新設を表明、翌一一年(一九三六)八月には、長崎市と佐世保市が工業学校誘致に名乗りをあげた。

長崎市は、県立工業学校新築費のうち三万円を負担。さらに男子師範学校の移転に伴い、不要となる桜馬場町の師範学校跡地を二〇万円で県から買い取ることで、誘致を優位に進めた。

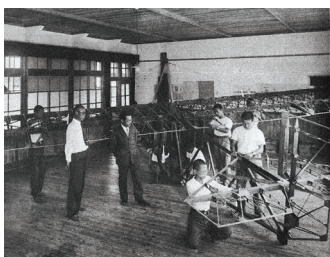
一方佐世保市は、県立佐世保中学校の改築移転工事の一二万五千円を負

担。さらに佐世保中学校跡に工業学校を開設し、その設備費七万五千円を負担することで誘致に名乗りをあげた。

当初、長崎市に工業学校を設立する方針であった田中知事も、両市が負担するという条件で急転直下、二校同時開校を決定した。

昭和一二年(一九三七)四月、県立長崎工業学校は、丸尾町の県立水産学校跡を仮校舎として開校した。設置学科は、応用化学科四〇名、造船科二〇名、木材工芸科四〇名。入学資格は、小学校尋常科(六年制)卒、修業年限は五年であった。

最初の入学試験は、四月一七、一八日県立瓊浦中学校で行われ、定員一〇〇名に対して四六六人が受験した。四月二九日第一回入学式、開校式が



木材工芸科実習(グライダー製作)
『創立五十周年記念誌』より

挙行され、本県における工業教育が始まった。昭和一五年(一九四〇)長崎市上野町に念願の新校舎が完成、移転した。



長崎工業学校跡の碑
(現長崎南山高等学校)

同年には、入学資格小学校高等科(二年制)卒、修業年限二年の第二本科が新設され、応用化学科四〇人が新たに入学した。その後、夜間に授業を行う第三本科も新設されるなど、昭和二〇年(一九四五)までに一五学科が設置された。

教育課程は、国語、地理歴史、代数幾何などの普通教科の他、用器画(設計)や各専門教科であった。昭和一六年(一九四一)になると、軍事教練が正課として取り入れられ、配属将校が派遣されるなど、学校においても軍事色が強まっていった。

参考文献『創立五十周年記念誌』長崎工業高等学校育友会・同窓会 昭和六三年